
SALUS サルス

遠山 玉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SALUS サルス

【Nコード】

N8951W

【作者名】

遠山 玉

【あらすじ】

【サルス学院】

世界で初の国際的な特別支援学校。身体的または精神的な「障害」を持つ子供を専門に受け入れ、社会的自立を目的とした授業を施すための教育機関。ただし通常の特別支援学校とは異なって、それらの「障害」の治療、分析、研究も同時に行う医療機関としての二面性も持つ。もともとは「障害」の治療法を研究していた小さな医療機関であったが、新薬の開発を成功させたことでアメリカにある大

手の製薬会社と提携を結び拡大。当初はアメリカ国内に数力所の同様な医療施設を建てただけだったが、薬品の開発や治療法の発見等の成果をあげることにより徐々に国外まで規模を伸ばしていき、その後に、効率化を図る目的で特別支援学校に形を変え現在にまで至った。

『本部』を発祥の地アメリカに置き、約三十の『支部』を世界中に建てていられると言われるが、その正確な数や点在している場所に関する詳細は一切公表されていない。サルズ学院は学院に籍を置く生徒の個人情報の保護をこれの理由としてはいるが、その真意は不明。

プロパガンダの疑いも当然のように各国で流れているが、国外にある全てのサルズ学院は治外法権をアメリカに依っているため、他国はコレを確かめる正当な術を持つことができないものとなっている。

鍋の代わりになるものを探しに行ったらステンレス製のポウルを見つけた。ペットボトルの水をその中に投入し、海岸にあった手頃な岩で作った簡易竈の上におく。火薬とライターを使い、ポウルの下に予め敷いていた枯れ木に火を点け数分、水が沸騰。

骨のついた生肉をナイフを使って分離させた後、肉のほうをポウルに投入する。骨をどうしようか迷ったが、なんとなく出汁でも取れるんじゃないかと思い、これもやっぱりポウルに投入した。

ナイフで骨と肉を分けた意味は……まあ、途中途中その骨を使ってポウルの中身をかき混ぜてたところを考えると、おそらくはあったんじゃないかと思う。

塩を入れ、醤油を入れ、その他適当な調味料をポウルに流しこみ肉汁らしきものが完成。

汁が、肉に残っていた血の色と醤油の黒色が混ざったようないかにも体に悪そうな色をしていたが、特に気にもせず、用意していた紙コップに掬い試食。

不味い、

戻しそうになったのを、左手で口を抑えなんとか止める。

想像していた以上の不味さと気持ち悪さが味覚を襲い、吐けと命令してきた。

吐け、吐け、吐け、吐け。

戻せ、戻せ、戻せ、戻せ。

海水を超えるような塩分濃度の汁と、肉が舌に触れた瞬間に味わった奇妙な感觸。噎せ、逆流してきたものが鼻から体外に出てこようとする。それでもなんとか、自分自身を説得し、飲み込ませるところに成功。

しかし紙コップの中身は空になったが、まだその十倍に近い量がポウルの上に待ち構えていた。

嫌になるな。

……口からそう漏らしたが、捨てるわけにはいかなかった。

空腹状態にあるわけでも、食べ物を粗末にしてはいけないという精神があるわけでもない。本当ならこんなもの捨ててしまいたい。

だが、この料理、とりわけ、この肉に関しては絶対に完食しようと心に決めていた。

馬鹿馬鹿しいことだとは理解している。他所から見たら滑稽な光景だろう。

しかし、こいつには今まで長いこと世話になったのだ。その存在を、生き残るためだからと言って無闇に切り捨てるわけにはいかない。

ならせめて、せめてもの償いとして、体内に取り込んでやるのが筋ってもんじゃないだろうか。

新しいペットボトルの蓋を開け、水を飲む。口の中を一度洗い、覚悟を決めた。

ポウルの中身を、今度は紙コップではなく陶器でできた大きめの容器に移す。

ポウルの中には骨だけが残った。

容器を手に取り、口に近づけていく。

何も考えず、容器に口を持って行き、口の中に流しこむように容器を傾けた。

感想はさつきと一緒だった。

豚肉、牛肉、鶏肉、羊肉、馬肉、魚肉、エトセトラ。人間が口にする肉の種類なんてのは、それこそ数知れず存在するだろうが、お

そらく絶対、生きているうちには食べないであろうこの肉の味は、トラウマでも植えつけてくれそうなくらいの口に合わなさを備えている。紙コップ一杯分のときは、味覚が感じ取る刺激の量が違う。先ほどとは別の感想、「まずい」というよりも「食べたくない」というのが新しく出てきた。

鼻を摘み、口を抑え、体外への逆流の経路を塞ぐ。

さつきと同様に噎せ、あたかも牛のように「飲み込む」と「戻す」を口の中で強制的に繰り返される。

その場で蹲り、一度無理やり飲み込む。今度は「戻す」という行為を実行させないよう、自分で自分の首を占めた。窒息しそうになるまで占めたが、生存本能が上手い具合に働いてか、丁度良い感じに逆流を防いでくれ、完全に飲み込むことができたようだ。

ポウル一杯を無理やり流し込んだのは今更ながら馬鹿な行動だと思ったが、この行動はどうやら正解のようだ。少なくとも、牛のよくな行為は止まった。

鏡があつたら自分の顔を見てみたいな、と鼻と口を覆ったせいで胃液やら鼻水やらよく分からないものがべつとりと付いた左手をみてそう思った。捨てるわけにはいかない、と意気込んでおきながら、やっぱり少しは体外に漏れている。

だが許容範囲だ。勝手にそう思い込むことにした。

ペットボトルの水で口を濯ぐ。多少は楽になったが、どうしても食べた後の違和感が拭いきれなかった。変な肉を食ったという精神面でのダメージも大きい。おそらく今後、なにかの肉を食べる度にこのことを思い出すだろう。

もっとも、『今後』などというものがあればの話だが。

ポウルに残った生肉の骨を手に取り、試しに齧ってみるが、やっぱり噛み砕けなかった。砕いて少しずつ喰うか？ 塩にある程度漬けて火にかけてみるか？ 魚の骨と同じような調理法をいくつか頭

の中に入れてみたが、先ほどの肉汁もどきを思い出すとどれも実行に移す気になれなかった。

結局、アルミホイルに包んで近くに置いておくことにした。

『今後』というものがもしあったら、記念に骨をダイヤに変えるとかいうアレをやってみたいと思う。

「……まあ、どこでやってくれるのかは知らねえけど」

西原日景。サルス学院に来て一番最初に説明されたのは、仕事の内容でもなく施設の詳細でもなく彼女の事だった。西原日景は学院の生徒で、抱えている障害は【対人恐怖症】。学院においてはレベル1に分類される程度の症状を持つ娘だ。授業には出席せず、常に学院寮の自分の部屋で時間を過ごしているとまで説明された。要はヒキコモリだ、と言いくるめたいところだが、彼女の対人恐怖症はかなり重篤のようで、例えば授業に出ようものなら……と言っより、他人と関わりうものなら失神、痙攣、過呼吸といった発作的な症状が拒絶反応として現れてくるらしい。厄介以上に禍々しく聞こえたが、それ以前にどうしてその話を俺にしたのか、この時はまだわからなかった。

俺は医大生ではあったが、専攻はあくまで『医療工学』であって『医学』ではない。同じ医大の学部であっても俺の属している学部は『医療』よりも『工学』に重きがある。だから患者のカルテを見ても理解はできないし、聴診器を持っても症状を判断するなんてことはできない。医療に関することで出来ることとすれば、それはレントゲンやMRIといった機械を操作したり、あとは義肢や装具の類を調整することくらいだ。つまり治療の下準備や後処置はできたとしても、俺には『治療』そのものをすることは出来やしない。

応急処置の仕方くらいなら一応は心得ているが、それが西原日景に対応できるかと聞かれたら答えはノーだ。……て言うか、そもそも対応したくない。真っ先に学院のことよりも彼女について説明しだしたのは、恐らくまあ俺が彼女に関わるフラグとして働くのだからうけど、もし出来るのであれば御免被りたかった。面倒臭いというのもあるが、何か嫌な予感がする。

数少ない友人である中間あぐりは、そもそも悪い予感がするのならサルス学院には行くべきではないと助言してくれてた。大学で唯

一の知り合いといえる斎藤柳緑は、治外法権が適用されるサルス学院では日本の警察は誰も助けに行くことは出来ないと忠告してくれた。サルス学院にて俺の相談相手ともいえる宮越夜光は、責任が持てないのなら学院の生徒とはあまり交流を持たないほうがいいと切言してくれた。

俺はそういつた言葉には大抵同意していた。そもそも他人を気遣う程、俺は善良な人間ではない。基本的にはエゴイストで、医大生ではあっても結局は不良少年の成れの果てに過ぎない。医大に行つたのだって、医者になつて誰かを救いたいだとかそんな背中が痒くなるような想いからでは一切なく、純粹に自分の利益のためだけに取つた行動だ。そりゃあ、突発的な想いから善行に走つたことも無くはないが、そんなもんは例えるなら『蜘蛛の糸』の作中でカンダタがやつた程度のものでしかない。俺は地獄には堕ちたくはないので馬鹿みたいに人を殺したり傷つけたり悪行を働く気はないが、だからといって自主的に善行に走る気も微塵としてなかった。

嫌な予感のする方へ進むほど、俺は危機管理ができない馬鹿じゃない。サルス学院には高給に眼が眩んで来てしまったが、それでも引き際は弁えている。いざとなりや辞表ぐらい出すさ。

……………そのつもりだった。

もしかしたら俺は気づくべきだったのかもしれない。

人間の「嫌な予感」ってやつが、はたして人間がどういう時に感じるものなのかを。

結局、俺は西原日景に自分から最後まで関わってしまった、あの時どうして真つ先に彼女の話がされたのかを知ることになる。それまでの過程で、俺は西原日景だけでなく宮越夜光や佐伯樹里といった様々な『障害』を持つ少女達と出逢い、彼女たちの秘密を知ったり、地獄行きが確定するような行為を取ったり、死にかけたりもするのだが、それでも、生き方を考え直すという珍しい機会には巡り合え

たように感じた。

正直、割りに合わない買い物をしたとも今でも思ってはいるが、それは今後の人生で還元していくことにしよう。今はとりあえず、これまでの話の中には出てこなかった、俺をサルス学院に導き、西原日景について真っ先に説明してきた、今回の出来事の全ての元凶となる人物について。

サルス学院人事部部長、ゼルダ・ドートリーという女の話から始めさせてもらおう。

「永淵雨中様でございますか？」

眼帯。

そう、眼帯だ。

ドラッグストアとかで売ってるような医療用の白いやつじゃなくて、海外の戦争映画で目を負傷した兵士とかが着けてそうないかにも「眼帯」っぽい黒いやつ。目に当てる部分が半円のタイプで、そこに多少ばかり金色の刺繍が飾り付けられてあった。

その眼帯を右目に付け、女性物の黒いビジネススーツを着た謎の女が、道に停めてあった車からいきなり出てきて、俺に近づくなり先ほどの言葉で尋ねてきた。

この俺、永淵雨中に。

く様、までつけて。

女が出てきた車は、俺が大学からの帰り道として一番よく使う道に停車していた。車は日本車ではなく海外メーカーの物でハンドルも右にではなく左にある。車に他に乘っている奴がいないところを見ると、女一人で運転してきたのか。

歳は恐らく二十代後半。喋った言語は完璧な日本語だったけど、ほぼ間違いない外国人。背中まで垂れた長い髪の色と隠れていない方の瞳の色が銀色に輝いていた。

女性にしては背が高く、全体的なスタイルもいい。モデルのような体型だったが、着ているビジネススーツとの相性からか、なんとなく秘書のようなイメージを感じ取れる。

そんでまあ、当たり前だけど知り合いじゃない。こんな奴知らないよ俺は。

「……………どちら様？」

眼帯にしろスーツにしろ、やけに黒という色がこの女には似合っている。髪の色も銀色とは言ったが、その髪の中にはところどころ

に黒い髪も覗いていた。

イメージカラーは黒。

仏教じゃ黒色は「地獄」を意味するんだっけな。

怪しさ満点。

ポケットに突っ込んでいた手をとりあえず外に出した。

「少々お待ちを」

女は個性の無さそうな喋り方でそう言うと、手に持っていた鞆から何かを取り出そうとした。

なんとなく『S & W M36』あたりの手頃な拳銃が出てきてそのままパンツと撃たれそうな気もしたけど予想は外れた。当たり前だ、とツッコミを食らうかもしれないけど、この外人女なら防犯用だとか適当な理由で本当に持ってそうな気がするんだよな。

出てきたのは何かが入ったプラスチックのケースだった。

……トランプのケース？

女はケースから一枚なにかを取り出し、傷や汚れがないか確認してからそれを俺に向けてきた。長方形で硬そうな紙質のそれ。なんとなく手裏剣にもつかえそうだけど……ああ、名刺か。

「わたくし、こういうものと申します」

お決まりのような言葉を添えて、俺に手渡される一枚の名刺。

「どうも」

丁寧に両手で渡されたけど、俺は左手で受け取る。

『S A L U S S C H .

Z E L D A D A U G H T R Y

C h i e f o f P e r s o n n e l D e p a r t m e n

t

』

……読

めねえ。

「私はサルス学院で人事部部長をやっております、ゼルダ・ドート

リーと申します」

ああ、読めた。

SALUSで「サルス」。SCHはSCHOOLの略で「学院」。二行目は名前。これで「ゼルダ・ドートリー」と読めばいいのか。三行目は「人事部の部長」という意味になるのか。なるほどなるほど。

……………んで？

「そのサルス学院の人事部部長さんが俺になんのようなのですか？」

『サルス学院』。

そついう名前の学院があることは知っている。

身体的または精神的な『障害』を持つ子供を専門に受け入れ、社会的自立を目的とした授業を施すための教育機関。特別支援学校の一種。

通常の特別支援学校と違うのは、それらの『障害』の治療、研究も同時に行う医療機関としての二面性を持っているというのもあるのだが、なにより特徴的なのはもっと別のところにある。活動の規模だ。

それがなんと国際規模なのだ。

交換留学生の制度を執っているとかそんなのではなく、学院そのものが世界中に点在してあって、その全てで先に述べたような教育と医療を障害者の子供たちに対して行っているらしい。

『MSF』というのを知っているか？

『国境なき医師団』とでも言えば分かるかもしれない。

間違っている点はいくつかあるだろうが、サルス学院の活動とはMSFの活動に「教育」を加えたものだと考えてくれればわかりやすいと思う。

「永瀧様はサルス学院の名前はご存知だったでしょうか？」

俺の言葉から何を読み取ったのか、女 「ゼルダ」だったか

はそんなことを言ってきた。質問を質問で返すなよ……………なんて説教は置いてくとして、ここは普通に返す。

「ええ、まあ大学で教えられる程度には」

サルス学院の名前は日本じゃそこまで知られていない。知っているのは学院関係者を除けば、多少なりとも医学に関わっている人が、ネットで「特別支援学校」という単語を検索し、某オープンコンテンツ百科事典のサイトに行き着いたことがある人くらいだ。

俺は場合は前者。

英語は得意じゃないけど、これでも一丁前に医大には通っている。俺って医大生だぜ！……なんて自慢する気には、所属している学部学科がアレなもんだからあまりなれない。名称を略せば「東大」になる大学に通っている学生が「俺って東大に通ってるんだぜ！」って言ってるようなそんな気分になる。

まあそんなわけだから、一応医大生である俺は、一応サルス学院についての知識はあるのだ。

「それで？ サルス学院が何のようですか？」

急かすように俺は再度聞いた。

ぶっちゃけ他人と話す時のこの言葉遣いは疲れんだよ。社交辞令で丁寧に喋っちゃいるけど、本音はさっさと普通の口調に戻したい。つーかさっさと帰りたい。

考えてみれば今日は大学四年生としての一日目が始まった大事な日だ。講義も初日からあり、課題となるレポートも大量に出されている。ただでさえ二年の時にサボりまくったツケが残ってるっていうのにこのままじゃ本当に卒業できなくなりそうなので、いい加減にこの女が本題に入ってくれないようなら早々に逃げ出そう。まだ会って三分と経ってないんだけどな。

「では……」

と、俺の気持ちが届いたのか、サルス学院人事部部長ゼルダ・ドートリーはその一言を置いて、続けてこう言った。

「……スカウトに来ました」

俺は逃げ出した。

直接寮には帰らず、晩飯の材料を買うためにスーパーに向かった。別に弁当を買って家で食うでもよかつたんだが、昨日も一昨日も三食ともに弁当だったので、たまには料理でもしなければなと思い頭の中でメニューを考える。思いついたのはナポリタン。スーパーに着くとまず目の前にあった野菜コーナーでピーマンを一袋カゴに入れる。次に肉のコーナーに行きソーセージを探した。豚肉、牛肉、鶏肉、羊肉、馬肉、魚肉、エトセトラ。色々な肉は見つかったがソーセージが何故が見つからなかった。近くにいる店員に聞いてみると、どうやらコーナーから外れたところに置いてあるらしい。そちらに向かう前に合いびき肉が安く売っていることに気づいたので、300グラムのもをカゴに入れた。ピーマンの肉詰めにもしよう。ソーセージのコーナーに着くと一番安いものを二袋手に掴んでカゴへ。最後にパスタを見つけてレジに向かい、金を払って店を出た。スーパーは寮から歩いて一キロほどの距離なのだが、その間は結構な坂道となっているので行きと帰りではかかる時間が異なる。厳しいのは帰り。タクシーを使いたくなる欲求を抑えて、体重八二キログラムの身体を動かしながら俺は帰路についた。

寮に着くと、ゼルダ・ドートリーが門の前にいた。

「こんにちは」

「……………」

「……まーいるよな。」

「そりゃいるよ。」

「帰り道で待ち構えてくれるくらいなんだから、住所くらい調べてあるだろうよ。」

「お話だけでも聞いては頂けませんでしょうか？」

特にか細くもなく、どちらかと言えば事務的な口調でゼルダは言った。

これがもう少し柔らかい口調だったら、眼帯であることを考慮しても怪しまれずには済む気がするのだが、この女は特に自分を取り繕おうとはしないようだ。

パーソナリティを大事にしているのは尊重するが、社会的にはダメだぞそれ。

「時は金なりって言葉知ってるか？」

俺は口調をいつも通りに戻した。

社交辞令終了。

やっぱパーソナリティは大事だよな。

「あんたと話しても俺にはなんのメリットも無いんだよ」

サルス学院は特別支援学校、すなわち障害者のための学校だ。

障害者の子供が教育するのに適した設備を整えるのには、非障害者の子供の時に比べて十倍近い金がかかる。盲目の子供のために点字の教科書を特別に用意するのとか、車椅子の子供のためにエレベーターを設置したりだとかそういう金だ。

そういう金が掛かるからこそ、国内の特別支援学校は年々規模が縮小してきているし、外国の国々によっては特別支援学校というもの自体が無かったりもする。

だからサルス学院の国際的なその活動には、それなりの大義があるんだろう。NPOに所属していないにも関わらず、おそらくはNPO並に人が助けられている筈だ。

……その筈だろうが、だからといって俺の知ったことじゃない。人を助ける、なんて面倒くさそうな仕事は俺には向いてはいない。そういう仕事はそういう事をしたと思う人間にやらせればいい。

俺は医大生で、そういうたところに所属している以上、間接的には人を助けているかもしれないが、しかしそれでも、俺はそんなことを思いながら勉強をしているつもりは毛頭無い。

断言してやる。全ては俺自信のためだ。

照れ隠しの要素なんていうものも、そこには一グラムもしてない。
「それじゃ、さいなら」

俺はゼルダを無視して門をくぐり、オートロック式の自動ドアを開けるためにポケットから鍵を取り出そうとした。

右手に買い物袋を持っていたので左手を使ったが、はめていた手袋が引つかかり地味に手間取っていたら、背後から足音が聞こえた。

ハア……。

ため息を付き、足音の主のほうに振り向いた。

「……いい加減諦めて帰ってくれないか？」

無論、相手はゼルダ。

強情と言うよりかは、命令をインプットされたロボットのような奴だな。

さつきから表情なんて一切変えていない。

完璧なポーカーフエイスだ。

黙っていれば綺麗、な女は結構見てきた気がするが、黙っていないければ綺麗、なんて女は記憶にはなかった。この女は恐らくそうだった類だろう。普段の日とかでも、殆どといっていいほど喋らないんだらうな。

「さきほど、時は金なりと言いましたね？」

そういうとゼルダは鞆に手を入れた。

また名刺でも出すのか、はたまた今度こそ『S & W M36』を取り出すのかと思ひ、俺は慌てて買い物袋を床に落とし、ポケットから左手も出した。手袋がはずれ、右手だけがはめているダサイ状態になったが生命には変えられない。

端から見てると本当に酷いよなこれ。もう癖にまでなってるからなかなか直せないだよ。

そんでまあ、出てきたのは「お札」みたいな長方形の紙。読み方は任せる。

続いて胸ポケットから万年筆を取り出し、サラサラとなにかをその紙に書きだした。

……ん？ おい！ まさかそれは！？

「これでお時間をとらせて下さい」

ゼルダが渡してきたその紙には、元からある印字とゼルダ自信がそこに加えた筆でこう書かれていた。

☐	ZELDA	DAUGHTRY	04/04/20
XX			
00	NAGABUCHI	UCHU	\$ 1000.

ZELDA DAUGHTRY

☐

その紙の名前はパーソナルチェック（小切手）。

なんとなく思ったけど「パーソナリティ」と「パーソナルチェック」って言葉が似てるよな。

やっぱパーソナルチェックは大事だよな。

「上がってくれ」

ポケットから鍵を取り出し、自動ドアを開け、自分の部屋へと向かう。買い物袋は忘れずに持っていったが左手袋を回収し忘れていた。いくらでも予備はあるから失くしても別にいいが。

にしても別に金が欲しいからあんな諺を持ちだしたわけじゃないんだけどな。

ゼルダさんバンザイ。

十萬ドルかと思っただけどやっぱり千ドルでした。

まあそれでも八万円くらいにはなるだろうからいいけどな。

さて。

ゼルダ・ドートリーにバンザイしたとしても、サルス学院にバンザイする気はさらさら無い。

理由は先のとおり。

俺にメリツトがない。

就職先が決まるじゃないかと思うかもしれないが……ところがどっこい、俺の就職先はもう決まっている。

中間あぐりという俺の数少ない友人が、祖父が経営している会社を引き継ぎ俺のことを誘ってくれているのだ。会社は小さいが医療関係のモノで、そこでは俺が大学で培ってきた知識や技術もそれなりに活かせるだろう。経営に関しても、既にあぐりが色々と考えているらしいので心配はしていない。確信はないが、あいつならなんでも適当にこなすだろう。

……なにせ中卒のくせに俺より頭が良いわけだしな。

部屋の鍵を開け、電気をつける。

ゼルダを家上げた。

よくよく考えたらこの部屋に俺を入れたのはこれで二人目だ。一人目は先ほど言った中間あぐり。二人目はこの女ゼルダ・ドートリー。

どちらも女だった。

大学で同じ学科の知り合いに斎藤柳緑という奴がいるが、こいつとはよく飲みに行ったりはするけど部屋に招いたことはない。多分、あいつは俺が寮に住んでいることも知らないんじゃないかとも思う。聞いてこないしな。

寮、と言っても食堂があるわけでも風呂やトイレが共同であるわ

けでもない。食堂を除けばそれらは全て各部屋に備わってるし、キッチンだって付いている。ただ単に、アパートの空き部屋を大学側が買取り、学生に安い値段で貸して、それを「寮」と言っているだけだ。

1kで、洋室6帖の小さな部屋。

そこが俺の住処だ。

部屋にある家具はベッドと丸テーブルと椅子が二つ。テーブルの上に置いてあったノートパソコンをベッドに放り、椅子を引いてそこにゼルダを座らせた。

「どうも」

相変わらずの変化しない顔でそう言った。

……この部屋を見たら何かしらの反応をすと思ったんだがな。

あぐりを初めて家に上げた時は、あまりの家具の無さに驚かれ、色々と言文を言われた。あの時に比べればテーブルに椅子が二つと合計三つも家具が増えてはいるのだが、その差のおかげでゼルダが驚かなかったわけじゃないだろう。多分この女はあぐりが初めてこの部屋を訪れた二年より前に来たとしても同じ反応をする気がする。俺はもう一つの椅子にはまだ座らず、キッチンに行ってコーヒーを用意した。インスタントやバリスタマシンのものじゃなくて、コーヒーメーカーを使った割と本格的なやつで。

客人を饗すためというよりかは俺が飲みたいだけなだけだな。

そうじゃなかったらコーヒー作るのにわざわざ五分も待たせないし。

自分の分だけ用意しようかとも思ったが、流石にやることがダサいと思ったので止めた。普通に二杯用意しよう。

「はいどうぞ。ミルク、砂糖はご自由に」

コーヒーの入ったカップと湯のみ、その他トレイに乗せ、テーブルに戻る。

客人用のマグカップを用意しているほどには俺の交友関係は発達していない。なので客が来たときはこうやって代用品を使っている。

椅子に座り、カップをゼルダの前に置き、俺は湯のみを掴んだ。

「……コーヒーがお好きなのですか？」

と、そこで以外な反応がゼルダから出た。

顔を見ると相変わらずの無表情だったが、今の声には気が立ったモノが含まれるように感じた。

「……関心してるのか？」

よく見ると、僅か、ほんの僅かだが左目が見開いている。

「まあ、好きか嫌いかって訊かれた好きって答えるかな」

「そうでしたか」

「あんたは？ もしかしてコーヒーとか苦手だった？」

「いえ、頂きます」

ゼルダは言い、カップを手に取った。一緒に用意した角砂糖には手を付けず、皿を置いたままカップだけを口に持って行く。

「……………」

様になっていた。

ゼルダが一旦口を離すまで、ついその動きを自分の目で追ってしまふ。

なんだ、こいつもコーヒーが好きなのか？

さっきは曖昧な答えで返した俺だったが、実を言うとコーヒーはかなりと言っていいほど好きだ。ただ別に味について語れるわけではなく、コーヒーを飲むという行為自体が気に入っていて、ほとんど煙草の代わりに口に入れているのだとあっていい。

「コーヒー好きなのか？」

ちよつとした期待を込めて思わず聞いてしまふ。

さっきゼルダが俺にしたのと同じ内容の質問になった。

「……そうですね、好きといえば好きですが……私の場合は生徒から影響を受けただけです。本当の意味で好きと言っているのかはわかりません」

「生徒？ サルス学院のか？」

特別支援学校にそんな生徒がいるのか？

「ええ、彼女はコーヒーが好きでして、よく私や他の先生方にも薦めてくれます」

「へー」

気が合いそうだ。

なんとなく湯のみに入ってるコーヒーを見つめる。座ってるテールブルは電気の真下にあるため、コーヒーには俺の顔が映っていた。

……とてもじゃないがコーヒーを趣味にするような男の顔とは思えないよな。

免許証とかの証明写真を取ると犯罪者みたいな顔になるだろ？

ああいった顔を標準搭載しているのが俺だ。

オールバックの頭は、ワックスを使った人工的なものではなく、俺が元から持つている硬い髪質がそうさせている。若干だが広いデコにニキビやシミといったものは特に見当たらないが、少しでも眉を動かすと思いつ切りシワがそこに現れ、大抵の奴らがそれを見るだけで何故か謝ってくる。目付きも悪い。三白眼とまでは言わないが、それでも虹彩の部分が人より小さい自覚がある。

俺は俺以外にコーヒーを趣味とする奴に会ったことはない。

少し気になったので聞いてみた。

「その子ってどんな子？」

「コーヒーが好きな子です」

「……あ、いや、そういう事じゃなくて、どういった性格の持ち主なのかとかさ」

「生徒を特定できる情報となりますのでお教えすることができません」

「……………」

でたよ。できましたよ。サルス学院が使う便利な言葉。生徒の

個人情報の保護。

次に来る言葉も大体予想できた。

「ですが、永淵様がサルス学院のスカウトを受けてくださるのであれば、直接お会いすることができると思います」

「いや、それはない」
ビシッとやってやる。

別に気になるとは言ってもサルス学院に行つてまで会いたくはねえよ。

そもそもなんでコーヒーの話題からサルス学院の話題に切り替わつてんだ。

千ドルのパーソナルチェックを貰ったとはいえ、俺は適当に話を有耶無耶にして帰ってもらつつもりだったんだけどな……。どうも上手くいかない。

この際さつさと要件聞いて早々に諦めてもらうかとも思ったが、まだそれは早い気がする。

なんとなく、ゼルダの眼帯に目が行つたのでその話題に持つていくことに。

「聞いちゃいけない事かもしれないけど聞いていいか？」

「はい」

「その眼帯って本物？ それともアクセサリー的な何か？」

なるべく失礼な奴を装つて俺は訊いた。こうすりゃ俺のマイナスイメージにも繋がり、諦めがつくかもと思ったからだ。就活でやると自殺行為以外の何物でもないなこれ。

……そもそもなんで学院が俺をスカウトしに来たのかが分からねえ。

医大生だとか研究内容だとかさういったところに幾つか思い当たる節があるにはあるが、それを訊いてしまつと多分そのまま相手のペースに持つていかれてしまいそうなので今は保留。

自分から地雷を踏みには行かないように、少なくとも、簡単には『サルス学院』の話題に転換されないような質問を俺はゼルダにぶつめた。

「この眼帯は『サルス学院』で開発しているものです」

……畜生。

「失つた視力を補うための機巧がこの眼帯には組み込まれておりま

して、現在試験中の品になっていまして私自身も……」

「あー、いいや。おっけ、わかった」

医大に身を置く人間としては、なんかめちゃくちゃ気になる内容だったが聞くのはよそう。サルス学院の話題であることに変わりはない。相手に俺のマイナスイメージを与えたとしても、俺自身が学院のプラスイメージを持ってしまったら籠絡の可能性も格段と上がっちゃう。

他になにか、本当に『サルス学院』へ繋がらない話題を探そうとしたが、

「一つよろしいですか？」

急にゼルダが口を開いた。

……しまった、話題を逸らし続けていたのがバレたか!?

千ドル貰って部屋まで上げてしまった以上、さすがに相手から話題を持ち上げられてそれを誤魔化そうとするのは醜い。

交流関係が絶望的な俺だが、それでもプライドと俺なりの自己ルールは持ち合わせているのだ。

その自己ルールの一つにあるのが「給料分の仕事はする」というもの。

今回に限っては「給料」と言うよりは「チップ」に近いものなのだが、だからといってそれを言い訳にすると俺のプライドがみみっちく思えてくる。

くそっ、しょうがない。腹を括るか。

俺は言った。

「……………砂糖ならトレイの上にあるけど」

普通に誤魔化す。

なんとも言う方がいい。

コレが俺だ。

「いえ、そうではなく」

無論、否定するゼルダ。

コーヒーはブラック派らしい。

「私が気になっているのはそちらのほうなのですが……」

ゼルダは何かを指さしそう言った。

「……ん？」

その先にあつたのは、俺の右手。

そこには未だ手袋がはまっていた。

「……あー。」

業務用品店で大量購入できる白い手袋。軍手とかではなく、ホテルマンや質屋、タクシーの運転手等が物を丁寧に扱うときのためにはめるような整理用の物。

そついや片つぼだけ外してたね俺。

左手はさつき放置してきたんだつたな。

「外さないのですか？」

そう尋ねてきた。

その顔には、相変わらずなんの嘲笑や軽蔑といったものはないポーカーフェイス。

単に疑問に思っただけなのか、間違えを気づかせてあげようという親切心か、それとも本題に入らせようとしないう俺への報復か、もしくは……。

「……」

沈黙したのは俺の方だった。

普段外出するときは常に両方の手にはめている手袋。こつすることとで特に不振がられず、むしろ清潔感のある男として見られることも多い。

だけど片腕だけにはめていけるとなるとそうはいかない。少なくとも清潔感のある男、と見られることはなくなり、むしろ何かを気取った厨二病野郎と勘違いされる。

どうしたものかと思ったが、もはや選択肢は限られる。

ここで「俺は潔癖症なんだ」と言うのもアリかと思っただが、そう

なると手袋をはめ直さなかった左手が明らかに嘘を付いているのでバレル。

だからって右手袋を外すという選択肢を執る気はない。しようもない俺のプライドが、それをさせることを拒んでいる。

「えーっと、ゼルダさん？」

「はい」

やむを得ない気持ちで、今度こそ本当にマジな気持ちで、俺は自分からゼルダの会話のテリトリーに入って行った。

「そろそろ仕事の話でしょう」

最浜医科大学。

それが俺が通っている大学だ。ちなみに私立大学。名のとおり医大であり、存在している学部も当然ながら医に関係があるものばかりになる。

代表的なものから言って『医学部』『歯学部』『薬学部』の三つをまず抑えておこう。

医大の顔とも言えるこれらの学部は、最浜医科大学ではなるべく人の目につきやすいよう都心にあるキャンパス内に三つとも収められている。キャンパス自体も、目立たせるためなのか地価の問題からなのかはさておき、「横に広く」よりも「縦に長く」設計され、ランドマークのような役割を担いながら形造られている。「最浜医科大学と言ったらこのキャンパスのことを指すんだ」とはさすがに明言しないものの、大学のホームページのトップ画面は常にこのキャンパスの写真がでっかく映っていたりもするので、言いたいのには明白だった。恐らく世間一般に最浜医科大学と言われたらこのキャンパスが真っ先に人の頭に浮かぶだろうし、このキャンパスに通っているのであれば「医大生」として我褒めもできるだろう。

……まあ俺の通っているキャンパスはここじゃないがな。

次に『獣医学部』『看護学部』『健康科学部』について。

これら三つの学部もさつきとは別のキャンパスにまとまって置かれているのだが、このキャンパス自体は先に述べたような都心部には建てられていない。どちらかと言えばその「近郊」と呼べるようなところに建っている。「近郊」の人口密度は都心部のソレと比べれば小さく、別に縦に長くも造られていない。街のランドマークとして成り立つような「有名度」はそこには確かにないだろうが、それでもこのキャンパスには最浜の付属病院が設置されている。名前は「最浜医科大学付属病院」。そのまんまの名前だが、同街にある

病院の中では一番に大きく、設備も一番にしつかりしている。受け入れ拒否、なんていうのも今のところは無いようだ。大人の都合上、大学のトップページは滅多に飾れないとは言え、誇っていいほどには「医大」として成立しているし、そのキャンパスに通っていい限りは自慢できる程度に「医大生」でいられるはずだ。

……だが俺の通っているキャンパスはここでもないのさ。

最後に『理工学部』『経済学部』『心理学部』について。

疑問に思うかもしれないが、その反応は間違いじゃない。最浜医科大学にはキャンパスが計三つあり、説明してない残り一つのキャンパスにこれらのような、どうして医大に存在しているのかが分からない学部が突っ込まれているのだ。一応、それらの学部から派生している学科名を聞けば少しは医大にある理由が分かってくれるかもしれないが、やはり偏差値自体が他のキャンパスの連中に比べてアレな以上、強弁にも成りかねないので言うのは留めておく。キャンパスのある場所は、都心部でもなければその近郊でもなく、ほとんど「田舎」と言っている場所に設置されている。属している県自体は他の二つと同じなのだが、土地の値段に十倍近い差があるような場所なので、とても同等であるとは言いがたい。そうした環境や比較といったものからぶつちやけた話、とてもじゃないが「俺って医大生だぜ！」と胸を張れるようなキャンパスではないのだ。

他のキャンパスの連中からは「最浜医科大学の底辺」だとか「医大生としての肩書きが欲しいだけの集団」とか言われているらしいが、あながち間違っていないので特に否定する気もない。どの学部でも勉強している内容は「医」というものに通じてはいるが、やはり入学してくる連中は、俺を含め、そういった精神の持ち主ばかりだ。

……そしてまあいい加減感じているとは思うが、この俺 永 洩雨中は、この最浜医科大学最底辺キャンパスにある『理工学部』に属している身だ。他のキャンパスの学生共から送られているであろう冷ややかな電波と、同じ学科の同級生共の嘘くさい物を見るよ

うな視線を背中に浴びながら、三年以上に渡る長い月日をその学舎で過ごしてきた。

……あと最後になんか付け加えて言うておくこととしたら何だろう？

私立大学って裏口入学しても罪にはならないってことぐらいかね？

とまあ、俺がいる大学のキャンパスというのはそういうところなのだが、改めて思い返してみると、ますますどうしてサルス学院が俺のことをスカウトしに来たのかが分からなかった。

特別支援学校なりに医の道に通じている奴が欲しいのだろうが、それなら俺なんかよりも『看護学部』があるようなそっち系のキャンパスの人間のほうが適材だろう。

「とりあえず、どうして俺をスカウトしてきたのかが知りたいんだけど」

コーヒーマウ一杯入れなおし、ついでに手袋を左手にはめなおしてから、俺はゼルダに訊いてみた。どうもゼルダはサルス学院についての簡単な説明から始めようとしていたみたいだが、学院についての概要は大学で習っていたし、別段聞きたくもなかったのでザツクリと割愛してもらった。時間も十八時半を過ぎ、若干腹も減ってきているしな。

ゼルダは「はい」と小さく返事をした後、続けて話した。

「私たちサルス学院は、永渕様を通つてらっしゃる『最浜医科大学』と一つの提携を結んでいまして、毎年、卒業生の何名かを学院のほうで雇うことになっているのです」

どうして俺が最浜医科大学に通っていることを知っているのかを聞くのは野暮なんだろうな。今の時代、自分のプライバシーなんてものは守りきれぬ筈がない。俺もさっきの手袋のことでツッコまれたくないのだから黙っておくことにする。

「昨年度は最浜医科大学の学生を三名、サルス学院のほうに就いて

いただくことになりましたが、その内の二人に少々問題が起きまして

「問題？」

「はい。就任した方々の名前は申し上げられませんが、現在では既に両方とも解雇の身となっておりまして、サルス学院を去っています」

問題と解雇という単語が一緒に出てきている以上、そこに隠れている事象はすぐに思いついた。

「不祥事でも起こしたか」

「はい」

あっさりとゼルダは認めた。

サルス学院は『国際的な特別支援学校』や『医療機関との二面性』という特色とともに、さらにもう一つ特徴的な体制を敷いている。

それは異常とまで言われる機密主義だ。

サルス学院は約三十の『支部』を世界中に建てていると言われるが、それについての正確な数や点在している国や場所に関しての詳細は一切として公表をしていない。

学院に籍を置く生徒の個人情報保護というものを名目に挙げているが、本当にそうであったとしても、学院の敷地内に米国の治外法権を敷いているという事実を知ってしまったえば、誰であっても度を越していると感じるのが普通だ。

治外法権が故に、サルス学院にどんな生徒がいてどんな研究をしているかの情報は、それを知ろうとするだけで外交に引つかかる可能性があるので、ほとんどの場合は漏れることがない。

大学の講義では学院について結構教えられ気がしたが、今思い返してみればそれはサルス学院と最浜との間に、ゼルダが言ったような雇用に関する協力関係があつたからなのだろう。

そして、その最浜医科大学の元学生が引き起こしたサルス学院に関する不祥事があるとしたら、それは間違いなく……

「不祥事ってのは情報漏洩の類か」

「……………」

コレに対してゼルダは沈黙で返した。

否定をしないってことは、学院の人事部部长という立場上、肯定ができないんだろうな。多分当たりだ。

「おっけ、訊かない」ここは貸しを作っておくことにする。「で、その話がどうして俺をスカウトするって理由に繋がるんだ？」

結局の話、俺が訊きたいのはそこだ。

スカウトって言葉の以上、俺が寝ぼけてサルス学院への就職志望届けを出したわけじゃないだろう。あくまで学院側が俺を誘いに来たのだ。

ゼルダは少し考えるように目を細めてた。どこまで言っているのかを考えている感じた。

「……不祥事を起こした二人の内の一人居ますが、その人は永瀬様と同じ『理工学部医療工学科』の出身の方でした」

「はい？」

理工学部医療工学科。

それは確かに、俺が通ってる大学の俺が属している学科に違いない。

医療に関係のある機械や器具などを、そういったものを主に学んでいく学科だ。

「えっ？ 何？ 医療工学科の連中でサルス学院に就職した奴がいのの？」

「今となつては過去のことですが」

「不適材不適所だろ。俺ら医療工学科は医療より工学に重きを置く学科だぞ」

俺たち医療工学科の人間は、病気や怪我を治すという意味での「医者」には間違つてもなることはない。あくまで俺らは医療の人間ではなく工学の人間だ。特別支援学校に雇われて障害者に対応できるようにな器量は持ち合わせているとも思えない。

馬鹿じゃねーのと吐きそうになっただけど流石に自重した。

どうせ俺のが馬鹿だし。

「あ、それともその医療工学科の奴は研究職だったのか？」

「サルス学院には医療機関の二面性を持っている。だから「サルス学院」という言葉は特別支援学校を表すのではなく、医療機関の方を指している場合もある。そう思ったのだが……」

「いえ、最浜医科大学の推薦枠からではサルス学院の教職にしか就けません」

……だそつだ。

やっぱり不適材不適所じゃん。

「サルス学院は不祥事を二人を解雇処分としましたが、その結果二人分の教師が掛けてしまいました」

「代わりの教師はいないのかよ」

「いないのです。生徒の身を守るといふ義務が我々にある以上は、簡単に外部の人間を学院に入れることは出来ませんし、個人情報漏洩などの不祥事が起きてしまわないよう、教員の数は最低限にしています」

アメリカの治外法権を持っているサルス学院からして、「外部」というのは日本人のことか。塾教師のアルバイトを募集するようなノリで人を雇うことは流石にできないんだろう。

不祥事の例に「個人情報漏洩」を持つてきたのも、十中八九それ起きたことを示していると見ていい。恐らく無意識の内に行ったのではなく意識した上で口にしたな。俺のさっきの質問に答える意味でもあつたんだろうけど。

「サルス学院は……というよりわたしはですが、空いた二人の席を埋めるために一度、最浜医科大学に行き相談にのってもらいました」
「なんでそこで最浜に行くんだよ!? 不祥事起こされたんだから見限れよ!!!」

「つーか不祥事起きた側が起こした側の古巣に行くつてのもほとんど脅しに近いよな。そりゃ文句をいう権利はあるかもしれないけどな。」

「そこで永淵様を紹介されました」
「……………」

ああ、クソッ。

……………そういうことか。

サルス学院、特別支援学校、障害者の子供たち。

最浜医科大学、企業推薦枠、元医療工学科の馬鹿による不祥事。

眼の前に座る眼帯をした女、クロエラ・ドートリー。

そしてこの俺、永淵雨中。

これらが繋がった理由が分かった。

自然と右手で頭を掻きむしる。

苦虫を噛み潰したような顔、この時の俺はそんな顔をしていたんだらう。

「……………紹介した奴は誰だ」

俺は問い質す。

「お教えできません」

「何でだ!!」

テーブルを叩いて抗議の体を示す。

湯のみとカップに入ったコーヒーの中身が少しばかりテーブルに飛び出た。

「サルス学院とは何の関係もないだらうがよ、そいつは!」

「情報提供者の身元は明かさないとこの条件の元で紹介されましたので」

「知ったことか!」

自分のプライバシーなんて守りきれぬ筈がないと先ほど俺は思ったばかりだが、だからってそのことに対して怒りを感じないわけじゃない。自分にとって害のない情報が漏れる分には特に気にはしないが、この「紹介」というものに関しては明らかに俺を害している。「言え! 眼帯女が!」

「言えません」

「ふざけんじゃねえ！ こっちは完全に侮辱されてんだ！！」

椅子から立ち上がり、咄嗟に正面しているゼルダの首向かって右腕を伸ばした。

ゼルダは反応をしないのか出来ないのか分からないが、そのまま身動き一つせず座っている。

一秒も掛からず首に手が届くこの距離で、俺は怒りに任せて行動を実行に移そうとした。

移そうとしたが、

「……………ッ」

寸前で思いとどまり、首に触れる直前で止めた。ゼルダの銀色の髪こそ右腕に垂れていたが、結果的にはそれ以外の接触の箇所は無い。

何をしようとしていたのかは言うまでもなかった。

俺はゼルダの首を絞めてでも、俺のことを紹介した奴を吐かせようとしたのだ。

(……………落ち着け……………落ち着け……………)

右手を引き、開いた拳を閉じる。

椅子に着き、左手で右手を押さえつけるような形で手を膝においた。

「……………すまん」

素直に謝った。

「……………いいえ」

この時俺はゼルダの目を見ず僅かに下を向いていたので、ゼルダがどういう顔をしていたのかは知らない。ただ、間こそあったものの、口調自体は変わっていなかったのでもうそこまで気にしていないものと勝手に判断した。

「……………」

「……………」

妙な沈黙が空間を支配した。

ゼルダは見た限りそこまで話すような奴とは思えないし、俺にしたらって普段は口数が多いほうじゃない。

無駄に防音が整ったこの部屋は、さっきの騒ぎで隣人に通報されることはないだろうが、それでも今の俺には有り難いものとは言えない。今はむしろ外部の音が欲しいくらいだ。

時刻は一九時を少し周り……、

沈黙を破ったのは俺の腹の虫だった。

寮から歩いて十分ほどしたところに、この町に数少ないファミリ
ーレストランが存在する。

入り口を入れてまず目にするのが壁際に並んである五つの椅子。
その近くには名前を書くための紙と、このファミレスとはなんら関
係性も見当たらない玩具グッズがいい値段で売っていた。

椅子には誰も座っていないかったが店内が丁度満席だったため、俺
とゼルダは席が空くまでその椅子に座って待つことに。

寮から此処までの道のりで、会話という会話は一切と行っていい
ほどしていない。適当な相槌と、沈黙を誤魔化するための俺の独り言
くらいだ。

ここに来たのは無論、晩飯を食うため。結局三日続けて栄養バラ
ンスが良いか悪いか分からないものを食べることになったがこの際
しょうがなく思う。晩飯とするはずだったナポリタンとピーマンの
肉詰めは材料は冷蔵庫に放り込んでおいた。

このファミレスには、ほとんど騒音目当てで来たと言っていていい。
とにかくあの空間の沈黙には耐え切れなかったのだ。

店内に響く、子供連れや高校生連中による会話の騒がしさがなん
となく俺を落ち着かせてくれた。

だが、それは俺だけの感想。

俺の左隣に綺麗に背筋を伸ばして座っている、このゼルダという
女はどんな気分なのだろうか。

「……………」
横目にゼルダの顔を見る。

銀色の髪よりも、黒のビジネススーツよりも真っ先に目に映った
のは眼帯。

眼帯女が！

部屋で俺が口にした言葉が頭を過ぎった。

侮辱で言っただけも無いが捉え方は相手次第で変わる。俺は他人のことを気にかけるような精神を持ち合わせてはいないが、だからって自分の咎を度外視したりはしない。

ましてやその後、俺はゼルダの首を絞めようとまでした。

結果的に実行に移さなかったとはいえ、やろうとしたことはクズに変わらない。

(……………馬鹿か俺は)

あれは怒る対象が違う。怒りに任せて眼の前の人物を殴るというのは、知の無いガキがやること。今、そういったガキと大差のないクズな俺は……………あまりにも醜すぎる。

呆れてため息が出そうになったが、それを隣に座っている奴に聞かれたくなかったので耐えた。

猫背で座っていた背中がうらぶれ、何年も前にやめたタバコが今になって無性に吸いたくなってきた。

……………そういえばなんでやめたんだっけ？

……………ああ、値上がりしたからか。

そんなことを頭の中でふわふわと思い出していた。

そういえばだが、ファミレスの入り口には玩具売り場の他にももう一つ、ガラス扉を挟んだ先にタバコの自販機が設置されてあって、そこ自体が小さい喫煙所になっている。ついでにライターもレジの横に、こちらはちゃんとファミレスのロゴが入った商品として売られてあった。

……………どうすっかな？

店内を見回してもまだ少し席が空く気配はない。

隣のゼルダも、未だ姿勢を崩さずただ座っている。

……………まあいいや、吸お。

椅子から立ち上がり、ガラス扉を開け自販機の前へ。小銭を入れて、適当に目に入った銘柄のボタンを押し、下口から取り出した。

封を開け、一本を口に加え、ライターを置く為に再びガラス扉の外側へと出る。

と、そこで、

「……………どうぞ」

いつの間にか俺の近くにいたゼルダが、何かを持って待っていた。

「……………」

ポカーンと、豆鉄砲でも食らったかのような俺。

ゼルダが持っているのは紛れもなくジッポー。

一目見てそうであることは理解したが、その行動に意表を突かれたのは確かだ、思わず口に咥えていたタバコを落としそうになった。ジッポーは店に商品として置いてあるものじゃなく、恐らくはゼルダ自身が個人で持っていたもの。そのフレームには、なんの皮肉かは知らないが十字架が掘られてあった。

「……………くくっ」

落ちそうになったタバコを歯で押さながら、俺は思わず苦笑する。そして素直にジッポーをゼルダの手から受け取り、もう一度喫煙所に入ってタバコに火を点けた。

「ありがとさん」

タバコの煙が漏れないように設計されたその個室の中から、果たして聞こえるかどうかは分からないが言っておいた。

徐々に吸ったタバコは、まあ特に美味くは無かったが、それでも寿命を削るだけの価値はあったと思う。ここに来てやっと頭が落ち着いた気がした。

口の中の苦虫が多少は出ていったのかもしれない。

とまあ、沈黙による重く苦しい空気は若干被えはしたが、何度も言いますけどパーソナルチェック貰おうが火を貰おうがサルス学院のスカウトには一切応じる気はありませんよマジで。

やっぱり面倒くさそうですもん、はい。

「二名様でお待ちのナガブチ様、二名様でお待ちの……お………」

タバコを吸い終わり椅子に座り直すと、少し待って女性店員が俺たちを呼んだ。俺とゼルダの奇妙な組み合わせにビビったのが、後半が俺たちと目が合うや少しばかりトーンダウン。

怪しさ満点の黒装束の銀髪女性（眼帯装備）と、厳つさ満点のオールバック野郎（手袋装備）の組み合わせにはいささか驚いたのだろう。俺たちの入れ違いで出ていった家族連れのお客も、なんか目を合わせないよう必死だった気がする。

店内は全テーブルが禁煙席となっており、店の中で唯一タバコが吸える所は先ほどのガラスで仕切られた喫煙所だけだった。

店員に誘導され、俺とゼルダは席に着く。俺は和定食を、ゼルダはペペロンチーノを注文してメニューが運ばれるまで待つことに。

ゼルダの注文したものが、俺が本来晩飯として作るうとしていたものに似ているのは気のせいだろうか……？

「今一度、お頼みます」

「あん？」

突然とゼルダは喋りだした。

……いや、言いたいことは分かっている。

間違いないサルス学院の話だ。

俺の暴走行為で有耶無耶になったかに思えたが、ゼルダにとってこれは仕事。このビジネススーツに身を包み事務的な口調まで板についた女が、そう簡単に退くとはもはや到底思えない。

徹底抗戦の構えを見せる必要がある。無論、暴力じゃなくて交渉の意味で。

この際、俺を紹介した輩について聞き出すのは諦めよう。今でも十分に腹が立つが止む終えまい。こうしてゼルダ自体が既に俺の存在を捉えた以上、いま回避すべき障害はこちらだ。

「サルス学院のスカウトを受けて下さらないでしょうか？」
「断る」

サルス学院は例外として、普通俺のような奴を雇用したがる企業はまずいない。最浜医科大学の底辺が集うキャンパスは一般の人たちにはさほど著名ではないが、企業等には悪い方の意味で名が通っている。理系の俺らでも、文系並に就活で困難すると言われるくらいだ。

……なんで入学決めたんだろ俺？

まあ、それはいいや。

とにかくこの女さえ諦めさせれば、今後俺に言い寄ってくる人間は当分として出てこないはずだ。

そうと分かれば徹底抗戦。

さすがにもう逃げるのは止めだ。

「第一に、面倒臭い」

壁を築きあげるように、俺は本音を告げた。

教師なんてものはやりたくない。

面白そうだななんて微塵も感じないし、それ自体になんらやり甲斐も見い出せん。

ましてや特別支援学校。

相手は障害者の子供たちだ。

子供ってだけで俺には十分無理臭いの、それに『障害者』まで加わったら手に負える気がしない。

「第二に、俺の就職先は決まっている」

二つ目の壁 仲間あぐり。

あいつが以前持ちだした起業の計画に、俺は恐らく乗ると思う。今のところ俺が選べる選択肢の中では、それが一番まともだ。

先のとおり、俺ら最浜の理工学部連中の就職活動は厳しい。それを打開する手段でもある。

「第三に、俺はまだ学生でいたい」

三つ目 ゼルダが寮で俺に話した内容を思い出してくれ。

1・二人ほど教員が欠けた。

2・その穴を埋める必要がある。

3・代わりの教員はいない。

言葉にこそしていないが事態は明らかに緊急を要している。これは俺ら学生が完全に社会人になる来年の話をしているわけじゃないもつと早期の話をしている。つまりサルス学院のスカウトを受けるということとは、同時に学生であることを放棄する必要があると見ていい。

これは流石に見逃せない。たとえ裏口から大学に入った俺でも、卒業ばかりは表口から出たい。それに大学の卒業と同時に貰える医療資格というのも幾つかは存在する以上、それを見過ごす手はないだろう。これまでの三年間がとことん無駄になる。

「第四に、俺に教師は無理だ」

どこの馬鹿かは知らないが、ゼルダに俺を紹介した奴が、どうして俺を選んだかの理由については察しがついている。もし本当にこの理由で当たっているのなら、それを俺に対する侮辱だ。本当は今でも誅伐として顔の形が変わるまでは殴ってやりたいと思ってる。だが……、

「第五に、俺は……」

今は何より、馬鹿の名前以上に知りたいと思うことが別にあった。対面するゼルダ・ドートリー。

……この女は、その馬鹿が何を理由に俺を紹介したのか知っているのか？

「この四つだ。この四つを理由に、俺はサルス学院の要請を拒否させてもらう」

右手の指を四本立て、それをゼルダに見せつける。

五つ目は結局思いつかず、四つ目はなんだか一つ目と被っている気がしたけどまあいいか。

とにかくこれらは“防壁”だ。

建材は主に俺の我儘と基本的人権。

「言っていることが最低かもしれないがな、被スカウト側の俺にはこれらを十分に言える立場にある筈だ。幻滅されようが知った事じゃない。それが理由で俺のスカウトを取り消すならそれはそちらの勝手。逆にそういった俺の性格をそちらが考慮したとしても、この四つの条件に何も出来ないようなら、流石に俺のことは諦めてもらうぞ」

一気に言っちゃった。今までのゼルダとの会話の中では一番に長い暴言を。

紛れも無く俺の本音だ。

棘あつて、毒があつて、鋭くて長い。

そんなイメージを持たせながら俺は吐いてやった。

この防壁を打ち破れるもんなら打ち破ってみやがれ、と加えて言おうとしたところで……

「……ではその四つの条件を満たせば、サルス学院のスカウトを受けたださるのですね？」

と、ゼルダは言ってきた。

……え？ なにその反応？

顔は相変わらずのポーカーフェイスだけどさ、待ってましたと言わんばかりの台詞じゃん……。

予想外の反応だったせいか、ついつつかり「……お、おう」と口にしてしまった。

なに肯定してんの俺!?

「第四の条件の解決案から提示させて頂きます」

訂正しようとしたその前に、ゼルダは喋りだした。

「つーかよりもよって一番弱い防壁を攻めるのかお前は。なんて奴だ。」

「教員免許の件で言っているのであれば問題はありません。こちらからのスカウトの場合、そちらは免除させて頂きます」

「うっ!?!」

「永渕様の学力にしましては既に調査済みです。受験時の点数には若干の不審な点が見られましたが、入学後の成績を見るかぎりには十分にサルス学院の生徒に教えられるレベルだと判断しています」

「おい!?!」

教員免許の件に関しては治外法権の都合からなんとなく予想していたが「………なんか色々とバレるとマズいことまでバレてるじゃねーかと思う。」

私立大学だから法律上の問題はないんだけどさ、やっぱりバレるのはよろしく無いんだよな。

最浜に迷惑がかかること事態は俺が気にすることではないけど、世間に知れたら最悪の場合は俺の学歴全てが抹消されるってのもありえる。

「第三の条件ですが、これにつきましても既に最浜医科大学に話を通しています」

「………は?」

「サルス学院のスカウトを受けて下さった場合に限り、永渕様の卒業に必要な単位は全て修得したものの見なされる筈です」

「………それってつまりアレだよな? ……大学行かなくてもサルス学院行ってさえいれば、卒業できるってことでもいいんだよな?」

「はい」

「……………」
単位が貰える……すなわち卒業ができる。
要するに学生でいられる。

そんな事が出来るのか一瞬考えたが、サルス学院には不祥事の件があつたのを思い出した。

確かにそれを交渉材料に最浜を脅せば、なんでも言うことを聞かせるくらいは出来るだろう。ましてや成績の操作なんてのは大した金も労力も使わなくて済む。書類を弄るだけで不祥事の賠償金やら何やらを帳消しにしてくれるなら安いもんだらう。

「第二の条件も問題はありません」

「……………え？」

問題ない？

二番目の壁はかなり潰されない自身があつたんだが……。

俺の就職予定先は誰にも話した記憶は無いし、志望の旨を大学に報告をした覚えもない。

もし仮に、例えば電話等の盗聴でそれを知ったとしても、中間あぐりは最浜とは関係の無い人間だからさっきのような交渉材料を使って脅すことは出来ないはずだ。

「……………!!」

いや、待て。

必ずしも交渉材料が最浜と関係のあるものとは限らないだろ。脅しの材料なんてものは個人個人で変わるし、何も材料が無くたって人を脅すことは出来る。

だが、もしも何らかの形であぐりを脅したのだとしたら、それはゼルダやサルス学院にとっては問題はないかもしれないが俺にとっては全くもって“問題なく”はない。むしろ大問題だ。

仮にそれをしていた場合、今度ばかりは本当に首は絞め切らせてもらう。

声にドスを効かせ、俺はその真意を問う。

「……………てめえ、それはどういう意味だ」

だがゼルダから出たのは、全くの見当違いの答えだった。

「永瀧様には、今年度だけ、サルス学院で教師をやってくださいればいいのです」

「……………は？」

その言葉の意味に眉をひそめ、力が抜けた右手がテーブルをゴンと叩いてしまふ。その音で周りに座っていた客に注目されてしまふが、ゼルダは気にせず言葉を続けた。

「サルス学院が永瀧様を雇う期間については話していませんでしたね」

「えっ？ あっ、ああ……………」

「わたしは来月五月一日から来年二月の終わりまでの期間を、永瀧様に学院の教師として勤めてもらうよう提案させていただくつもりでした」

「なっ！？」

何だと！？

「この条件であれば、永瀧様の就職先の企業様に一切の迷惑をかけずに済むと思ひまして……………それにご希望でしたら、その後の期間も続けてサルス学院に勤めていただくことも可能です」

「……………」

大口を開けて、馬鹿みたいな顔をする俺。

……………いや、でもよく考えたらそれが普通なのかもしれない。

サルス学院が欲しいのは空いた穴を埋めるための人材……………臨時の教師だ。

外部の人間を簡単に入れることはできないから、関係者として提携を結んでおり、且つ融通が効く最浜に人材を求めて来たと考えるのなら不思議ではない。最浜医科大学の……………ましてやあのキャンパスに所属している奴らなら、いざとなったら簡単に切れるし補給も可能だ……………自分で言っていて悲しくなるねコレ。

書かれていたのは数字が羅列する表。

やけに「0」が目立つ。

そして俺は、一種の本能、野生的な勘から、それが何かを直感で理解した。

「……サルス学院の、俸給表!？」

思わず席から立ち、衝撃で固定してあったテーブルやソファーが僅かに悲鳴をあげる。

俸給表って言葉は間違いだが、初任給の欄に書かれてあった金額が日本の国会議員のそれと大差なかったため、思わず使ってしまった。

すなわちそれはサルス学院の給料表。

ああ、なるほど。メリットでメリットを消すことは出来ないが、個人の感情を変えることは出来るわな。それこそ千ドルの小切手で見知らぬ女を部屋に上げるような男なんて特に……。

昔誰かが言っていた台詞を思い出す。

命はお金で買えないけど、世の中にはお金で買える物の方がいっぱいあるってこと、忘れないで。

このゲームの続編は別にやったことないけどな。

結果的にボロボロにされました。

ゼルダが放った「解決案」という名の砲弾は、俺の我儘をふんだんに詰め込んだ防壁を早々にぶち壊し、俺に一種の葛藤のみを残した。

金を取るか、それともキャンパスライフを取るか　という葛藤を。

「……………」

確かに、俺の出した条件は全て解決された。

サルス学院に言っても「学生」としての身分は保証されるし、来年にはあぐりの企業計画にも参加できる。障害者の子供を相手にする面倒臭さだって、流石にこんだだけ金を積まれれば俺だって気が紛れるさ。

普通のサラリーマンには見当もつかないほどの月給。

間違えて年休の欄を見ているわけでもなければ、金額の単位がジンバブエドルになっただけでもない。

この額ってマジなのか……？

テーブルの上に置かれてある紙を指さし、念のためゼルダに聞いてみた。

「……………これって単位は円でいいんだよな？」

「はい。間違っています」

「数字が三桁おきに書かれてある点は“カンマ”でいいんだよな？
実は小数点でしたってオチじゃないよな？」

「はい、カンマです」

「……………」

……………サルス学院が最低限の人数しか雇用しない別の理由がある気がする。

つーかマジでどうしよう？

本来なら迷う要素なんて何一つ無いんだけどさ………
いつもの俺なら迷わず金を選択してんだけどさ………
すっげー嫌な予感がする。

「ううああ………」

思わず声にならない声まで出てきた。

肘をつき、両手を組んでデコを置く。

眼の前に提示してある給料表だけを見ると、どうして今も俺が首を縦に振らないのか疑問にすら思えてくる。

金額はあまりに魅力的で、壮麗で、八面玲瓏として俺の心を動かす。

…… 本当に金が好きだね俺って。

自分でも驚いてるよ。

「ああああああ………」

あつ、そろそろヤバイ。とうとう意識してないのに言葉が漏れてきた。

俺が今迷っているのは、このスカウトを僥倖と取るべきなのか否か？

僥倖と取れば、あのつまらないキャンパスライフからおさらばすることができ、足りていない単位が悩まず呪縛も解け、講義や研究といった下らない時間の浪費も無くせる。

奇禍と取れば、目の前に提示されてある金が手に入ることはないが、疑心暗鬼と化して申し掛かかってくるゼルダの誘惑から解放される。

俺のゼルダに対する第一印象は今でも変わっていない。

眼の前に座っているこの銀髪眼帯外人黒服女は、本来なら全力で関わるのを避けるような対象だ。どこからどう見ても怪しいし、誰が見ても不審を抱く。せめて服装が眼帯をどっちか白にしてくれ。言ったかもしれないけど黒って「地獄」を意味するからあまり縁起は良くないんだよ。

「ううううああああ………」

罨の可能性だつてある。

だがそれが杞憂だつたらどうする？

そしたら俺は易々と人生の好機を逃したことになるんだぞ？

そもそも俺に罨を張る理由なんてあんのか？

それに関してはゼルダは俺が紹介された理由を知っているかどうかに依る。

理由を知っていれば罨の可能性は高いが、知らなかったらこれは俺の取り越し苦労だ。

金は無いよりある方がいいに決まってる。

命は金じゃ買えねえけど、人生つてのは金で変えることができる。

「買う」と「変える」つて漢字の部分の読み方一緒だな。

「取り越し苦労」つて使い方あつてんのかね？

日本語つて素晴らしいな。

そして大体十五分くらいが経つたところ……

「ああ……………」

「……………」永渕様？

「……………」

「……………」永渕様

「はっ!?!」

ゼルダの呼びかけに気付き、俺は目を覚ました。

別に寝てたつて訳じゃないが、意識だけどこかに旅立っていた気がする。

後半なんか金とは別のことを考えていた気がするのは何故だろう

……………。

テーブルの上を見ると注文したメニューは既に来ており、ゼルダのペペロンチーノに関してはもう完食された後だった。

……………起こせよ。

寝てないけどさ。

「いかなさいましたか？」

ゼルダが僅かに首を傾げながらそう尋ねてきた。

一応は心配してくれているらしい。

「……あ、いや……何でもない……」

とりあえず平然を装い、俺も和定食を食べるために割り箸を掴む。

「いただきます」と言いながら、割り箸を持つ両手に力を込めると

……、

バキッ！ という音が鳴り、左側が半分ほどの長さのところまで折れた。

「……………」

食う気が失せた。

よく見たら味噌汁も米も冷めてる。

もういいや水でも飲もうと思いきやコップに手を伸ばす。

「……………」

中身は空だった。

多分、無意識の内に飲んでいたんだろうな。人間緊張が高まると

水分を欲するらしいし。

なんかもう泣きたいよ俺……。

「ゼルダさんよ……」

視線を下にして、俺はゼルダに言った。なぜか敬語で。

「……………」返答まで時間くれませんか？」

みっともない返答だったが、今はこれしか言えなかった。

四月が始まって、まだ日はそんなに経っていない。ゼルダは来月の

一日から雇いたいと言っていたから、少しは考える時間をくれる

かもしれない。

逆にここで時間を貰えないなら、俺はサルス学院のスカウトを断ることにする。

ここまで頭の中がこんがらがっていると、俺はどうせまともな返事をしない。今一番欲しいのは時間だ。二、三日でもあれば、ゼルダが言っていた条件が本当かどうかの裏も取れるし、あぐりや斎藤

の奴ともこれについて相談することができる。

俺はゼルダの返事を持った。

「わかりました」

「！」

俺は顔を上げ、目の前のポーカーフェイスを見る。

「一週間以内に返事を下さい。電話番号は、お会いした時に渡した名刺の裏に書いてあります。時間帯はいつでも構いません。永瀬様が決心のついた時に、ご連絡ください」

「……………感謝する」

そう言っつてゼルダは立ち上がり、鞆を持ちテーブルに置いてあつた資料をしまった。

「……………あれ？ 帰るのか？」

「はい。わたしはこれから、まだ少しやることがありますので」

現在時刻は八時二十分。こんな時間になつてもまだやることがあるのか？

まあ、別に俺もこれといつて話したいことは無いので見送ることにする。

「そうか、じゃあな。近いうち連絡する。会計は俺がしとくから気にしなくていいぞ」

「ありがとうございます」

そう言っつてゼルダは背を向けた。

「……………」

その背中を見て、改めて女性にしては背が高くモデルのような体型だなと感じた。

なんでこの女は特別支援学校で働いてるのかな？

空のコップを口で持ち上げながら、不意にそんなことを思った。

眼帯をしているとは言え、別に就職先に困るような女とは思えない。恐らく、と言つより絶対に俺より頭も良いだろう。

人の思考に入り込むのも上手い。俺が出した条件は、全て予測されていたのだろう。そうでなければ、あそこまで即座に対応はでき

なかった筈だ。

正直、人間離れた何かを持っていそうで畏怖すら感じる。与えられた一週間の内に、ゼルダ本人のことも調べられたりしないだろうか？

念のため、明日か明後日にはあぐりに連絡を入れよう。あいつなら、多少はサルス学院についても知っているだろうし、ゼルダのことも調べてくれるかもしれない。

斎藤の奴にも強力をさせよう。もしかしたら、同じ医療工学科のあいつにもゼルダが接触している可能性があるし、場合によっては斎藤自身が俺をゼルダに紹介したとも考えられる。そこらへんを見極めるとするか。

「……そうと決まれば、今日はもう飯食って寝るか」

幸い時間が貰えると分かったせい、食欲が戻ってきた。

割り箸を貰うため、店員を呼ぼうと周りを見ると……

「……あれ？」

黒いビジネススーツを着た銀髪の女がすぐ横にいた。

ゼルダがまだ帰らずにいたのだった。

「どうした？ 忘れ物か？」

俺は訊いてみるが、生憎テーブル席にゼルダの私物と思われる物は見当たらない。

もしかして寮の俺の部屋に物を忘れたのかとも思ったが……、

「……いいえ」

ゼルダはそのポーカーフェイスで否定した。

「じゃあ何だ？」

他に俺に用事でもあるのか？

この女から「タクシー代がないんです」などと言われることは無いだろうが、もしその場合であっても今の俺なら貸してやれる。なにせ、既にお前からは八万近い金を貰ってる訳だしな。

「……永渕様」

だが、やはりこの女に限ってそんなことは言う筈がなく、常に変

化の少ないその口から出たのはこんな言葉だった。

「……サルス学院………いいえ、……このわたし、ゼルダ・ドートリーは………永淵雨中様のお力を必要としています。私事とはなりますが、どうかお力をお貸し下さい………」

この時、俺は確かにゼルダの顔から「焦り」という感情を見た。

無表情で、ポーカーフェイスで、何を考えているのかわからない顔が常だったゼルダの内面は、この時一瞬だけ浮き出たのだ。

「………」
その言葉を最後に、今度こそゼルダ・ドートリーは去っていった。後に残されたのは、俺と和定食とゼルダが平らげたペペロンチーノの皿だけ。

さっきまで俺の中に残っていた葛藤も、どういう訳か今この空間には残ってはいなかったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8951w/>

SALUS サルス

2011年10月25日02時05分発行